

《書評》

ヨハヒム・ラトゥッカウ（海老根剛・森田直子共訳）
『自然と権力』 みすず書房，2012 年*

森 涼 子

本書は、ドイツにおける自然・環境保護史研究をその創叢期より中心的に担ってきたヨアヒム・ラトゥッカウが2000年に出版した『自然と権力 *Natur und Macht*』の邦訳である。本邦訳には、2008年英語版における加筆・修正が反映されており、さらに日本の自然資源史に関する1節、日本語版のための序言、あとがきが新たに書き下されていて、初版にはなかった部分が加わっている。原書の出版から年数が経つため、内容それ自体はある程度既知になっているかもしれない。ここでは本書の議論が今日の研究動向の中でどのような意味をもつかに焦点をあてて評したい。

1 自然資源利用の世界史

本書は、自然の資源としての側面に焦点をあて、政治権力がどのようにこれを管理し、統治しようとしてきたかを世界史的に叙述する試みである。「自然への愛の歴史は描かれてきた。しかしエコロジ的環境運動の歴史は描かれていない」、こうラトゥッカウは執筆の意図を記している。評者が概観したところによると、人間と自然の関係および自然観の歴史の変容に関する研究は少なくない。例えば、グロイ『自然観』(Karen Gloy (1995/96) *Das Verständnis der Natur*) は、学問、宗教、文芸など諸分野において自然がどのように理解されてきたか、シャーマ『風景と記憶』(Simon Schama (1995) *Landscape and Memory*) は、風景が各国々において集団の記憶と結びついてきた歴史を叙述している。グロー等の『世界像と自然習得』(Ruth und Dieter Groh (1991) *Weltbild und Naturaneignung*, (1996) *Die Außenwelt und Innenwelt*) は、暗喩としての自然を歴史的に描いている。また時代を限定した研究としては、中世における人間と自然との関わりを論ずるツィマーマンの『中世における人間と自然』(Albert Zimmermann (1991) *Menschen und Natur im Mittelalter*)、19・20世紀における環境を描くブリュッゲマイ

ヤーの『征服された自然』(Franz-Josef Brüggemeier (1987) *Besiegte Natur* 平井旭訳『ドイツ環境史: 19世紀と20世紀における自然と人間の共生の歴史』リーベル出版, 2007年) などがある。さらにドイツに限定する自然・環境史としては英語での出版が多く, ドミニク『ドイツにおける環境運動』(Raymond Domini (1992) *The Environmental Movement in Germany*), レカン『ドイツの自然』(Thomas Lekan (2005) *Germany's Natur*), マウフ『ドイツ史における自然』(Christoph Mauch (2004) *Nature in German History*) などが興味深い¹⁾。

2000年の本書初版出版後, 環境史をテーマとする研究が相次いで出版された。広域環境史としては, ブリュッゲマイヤーの「国際環境史」(Franz-Josef Brüggemeier (2000) "Internationale Umweltgeschichte", Wilfried Loth, Jürgen Osterhammel (Hg.) (2000) *Internationale Geschichte*), ジーマンの『環境史—テーマとパースペクティヴ』(Wolfram Siemann (Hg.) (2003) *Umweltgeschichte. Themen und Perspektiven*) などが挙げられる。レームクールとヴェレンロイター共編の『歴史家と自然—比較環境史の試み』(Ursula Lehmkuhl, Hermann Wellenreuther (Hg.) (2007) *Historians and Nature. Comparative Approaches to Environmental History*) はドイツとアメリカとを比較する論考であり, ユケッターの『環境史のフロンティア』(Frank Uekötter (Hg.) (2004) *The Frontiers of Environmental History, Historical Social Research Vol.29*) は, 狩猟, 砂糖生産, 農業問題, 宗教など多岐にわたる領域を視野に収めて研究の「フロンティア」拡大に寄与している。こうした後続諸研究と比しても, 政治権力による自然資源管理というラトゥカウの視点はいまでも独自性を保っている。

本書は, 1970年代までの自然資源の歴史叙述(2~5章)と, 現代環境問題の分析(6章, 終章)とから構成されている。2章は, 自給自足経済における自然資源を扱う。狩猟採集の時代, 多くの狩猟民は, 必要量以上の狩りをおこなわないこと, 移動空間を限定することによって, 自らの生活空間に過剰な負荷をかけるのを防いでいた。農耕を開始した定住民も, 自分の畑が豊穡であり続けるためには環境に配慮せざるを得なかった。この時代には, 比較的狭い範囲で生活が営まれていたため, 環境に被害を及ぼした本人自身がその帰結を引き受けることとなり, 資源をめぐる対立相手もまた見ず知らずではなかった。このことが資源搾取を制御しており, 自給自足経済は「比較的」環境に負荷をかけない経済様式であった, とラトゥカウは結論づけている。

3章は, 古代から近代が始まるまでの長い時代, 古代中国からアフリカ, ヨーロッパ諸国にいたるまでの広い領域における, 水・森林資源問題, 政治権力による河川氾濫対策,

灌漑施設建設、植林政策などを扱う。1500年頃より始まる「森林保護」と称する政策は、支配者の権力行使の場であり、政治権力がこれら自然資源を支配することを正当化するものであったという見解は、氏の長年のテーゼである。

4章は、ヨーロッパ世界が植民地の自然資源に対して及ぼした作用を考察する。19世紀以降植民地諸国において、自然破壊、野生動物乱獲、土壌酷使が進む。しかし他方で、例えばインドにおけるイギリスの影響は周縁的にとどまっていたこと、イースター島の自然破滅は、植民地時代以後の内戦によって到来したことなどを挙げて、ヨーロッパが「楽園を救いようのない荒野に変えた」というのは安易な一般化であると批判している。

5章では、近代ヨーロッパ世界で成立した新たなタイプの自然観が示される。自然科学の発達により自然は世俗化し自然資源の最大限利用が目指された。同時に、自然の神格化・理念化が進み、自然憧憬が登場するのも近代である。また国民国家形成の過程において「ナショナルな自然」が新たに発見された。

ラトゥッカウは、5章までの歴史を過ぎ去った「過去完了 *Vorvergangenheit*」としてではなく、今日なお重要な意味をもつ出来事として描いている。なぜなら「今日の環境行動様式は、部分的にはきわめて古い行動様式を受けついで」おり、現代人の認識も「部分的には前時代の問題状況から発生している」からである。この観点に基づいて「歴史に深く潜入し、どこに今日の環境行動様式がプログラミングされているのか」を解明するための環境史研究を提唱するのである。歴史叙述は、現代の環境行動をよりよく理解するため、将来の環境政策の在り方を探るためであり、ラトゥッカウはこの問題を6章以降で詳論している。

2 〈エコロジーの時代〉における〈環境問題〉と〈環境意識〉

現代環境運動の展開を、これまでの研究から簡単に述べると以下のようなものである。第二次大戦後に自然保護運動を担ったのはナチス時代に自然保護関係の職務にあった人びとであった。彼らの発想によると、自然保護はドイツ社会を「健全」に教育するためのものだった。この家父長的な自然保護とは別に、1970年頃より権威を否定し、民主主義をめざす新たなタイプの活動が始まる。〈環境〉という用語が頻繁に用いられるようになるとともに、〈自然保護〉と〈環境保護〉の区別が次第にあいまいとなり、半ば同義語のようになっていくことは、しばしば指摘されている。

2.1 環境史の転換点

本書でも同様に、自然の汚染および自然資源をめぐる紛争は何時の時代にも存在した、しかし〈現代環境問題〉はそれとは異なった質をもつと、ラトゥカウは解釈する。そして、この新たなタイプの環境問題が発生したのは第二次大戦後、それも「つい最近の時期」1970年代であるとみる。この時期に「環境の最も深い転換点」があり、「100万年をかけて形成された化石エネルギーを1年で消費してしまうような経済様式」が成立し拡大していった。フィスター Christian Pfister は「1950年代シンドローム」テーゼにより、1950年代に重大な転機が生じ、環境史は最低点に達したと論じたが、これに対してラトゥカウは、「アメリカ文化に象徴される物質的安楽さ」への信奉は50年代には未だ世界中に広まることはなく、根本的変容は1970年代に進行したと考える。この時期に「成長こそ通常の状態であると見做す経済志向が勝利」し、「これまで数千年続いていたエコロジ的安定」が崩壊したのである。1970年代初頭、「もはや飢えを知らず、したがって「ポスト物質主義的な」価値を求める裕福な工業国」において環境運動が高まるまさにその時期に、「第三世界の多くの地域は、第一世界よりもずっとひどく、より直接的に環境問題にさらされ」ていた。化学肥料の大量投入および大規模灌漑は「農民の自給自足経済を、それ以前にはあり得なかった規模で破壊し」、数千年にわたって続いてきた生態系、「小空間における物質循環」が崩壊した。〈現代環境問題〉とは自然資源の搾取が、程度として史上例のないまでに高まったこと、地理的に限定されることなく世界中に拡大したことから発生したものであり、さらに、こうした諸問題の相乗作用がうみだす新たな諸矛盾なのであると、ラトゥカウは説明している。

2.2 新しい不安と古い愛情

こうした背景のもとに〈現代環境意識〉が生まれ、環境運動の動機となるのだが、これは単なる〈自然への愛〉の高まりからは説明されない。〈自然への愛〉は昔から存在するが、〈現代環境意識〉の中核となっているのは新しい感情である。すなわち、自分たちの健康が自然破壊により脅かされかもしれないという〈不安〉が環境運動の土台となっていると、ラトゥカウは捉えている。古くからの愛情と新たに生じた不安とが結びつくことによって、環境意識は「切迫した情熱」となった。そして、この現代環境意識の基盤となっている危機感は、放射能と癌への不安から発している。ドイツでは原子力利用に対する「黙示録」的な警戒心が「環境運動全体の触媒として機能」し、癌イメージは環境破壊の暗喩ともなった。ここで氏独自の見解として注目すべき点は、恐れの対象と

なっている脅威が「本質的に仮說的なもの」であること、「それによって起こりうる事態を心中に思い浮かべるには想像力を必要とする」ことである。ちなみに社会学者ベックは既に1986年出版の『リスク社会』（Ulrich Beck (1986) *Die Risikogesellschaft, Auf dem in eine andere Moderne*, 東廉, 伊藤美登里訳『危険社会 新しい近代への道』法政大学出版局1998年）において、環境破壊の危機感の土台になっているのは、感覚器官によって知覚できる変化ではなく、科学によってのみ推定されうる本質的に憶測的なリスクであると指摘している。

「黙示録的な警告の声」とラトゥッカウが呼ぶ出版物が、こうした不安を醸成していった。レイチェル・カーソンの『沈黙の春』は自然汚染により小鳥のさえずりの聞くことのできない未来像で波紋を呼んだ。ドイツ語圏で最も影響力があったのがギュンター・シュヴァーブ『悪魔とのダンス』である。ラトゥッカウは、シュヴァーブが本のタイトルに常に「悪魔」という語が用いることによって、環境破壊を人類滅亡を目論む悪魔の企みとして暗喩していると評し、そのことによって時事的な環境破壊への危機感が「太古からの地獄不安」と結びついたと、論じている。

2.3 現代環境意識の諸解釈

評者のみる限りでは、1970年代初頭に〈エコロジーの時代〉が始まったことに関しては、研究者のあいだでほぼ共通の理解がある。しかし、この時代を特徴づける〈環境意識〉の説明は様々である。新たな環境保護運動の成立を文化変容と関係づける研究者は多い。2005年に出版されたブリュッゲマイヤーとエンゲルス共編『1945年以降の自然・環境保護』（Franz-Josef Brüggemeier, Jens Ivo Engels (Hg.) (2005) *Natur- und Umweltschutz nach 1945*) は、環境保護の動きは19世紀より見られるが、政治的エコロジーが形成されるのは1970年頃であるとしている。この時期をもって「古典的近代」は終わり、環境意識が形成され、この意識が成長志向の進歩モデルからの決別の指標となる。エンゲルスは翌2006年出版の単著において(Jens Ivo Engels (2006) *Naturpolitik in der Bundesrepublik*), 1970年代に環境状態がそれ以前と比べて特に悪化したことは明確ではなく、環境保護運動の成立は統計上の数値からは説明できない、と論じている。エンゲルスに依れば、環境運動は汚染状態それ自体ではなく、むしろ、この状態が問題視 *Problematisierung* されるようになった結果起こってくるのである。核エネルギー利用をめぐる言説転換を扱うクッパーも(Patrick Kupper (2005) *Gestalten statt Bewahren: Die umweltpolitische Wende der siebziger Jahre, nach 1945*, S.145 – 161),

自然保護団体が短期間で核エネルギー利用に関する見解を変えたのは、単に外的「刺激」が引き起こしたリアクションなのではない、これは事象の歴史ではなく、出来事の背景にある「感じ方 *Gesinnung* の変化」なのだと解釈している。1970年代は、環境史だけでなく、社会学でも注目されている。ベックは上述の書において、1970年代にリスク社会への移行があるとしており、ブランド、ブュッサー、ルフト等も（K-W. Brand, D. Büsser, D. Rucht (1984) *Aufbruch in eine andere Gesellschaft. Neue Soziale Bewegungen in der Bundesrepublik*），同じくこの時期に市民運動が質的に新たな段階に入ったと論じている。

こうした研究動向から鑑みるならば、ラトゥカウ説の独自性は、現代環境問題を数千年に及ぶ歴史展開の帰結から描いていること、環境意識に古くからのキリスト教的終末イメージを見ていること、しかし同時にまた、現代に特異な状況に対応するための「新たな政治スタイル」を考えようとする点にある、といえよう。

3 新しい運動と新しい政策

ラトゥカウに依れば、環境運動は「青天の霹靂」のように登場したのではない。煙害、炭鉱からの排出物、住環境の悪化など、1世紀以上も前から続いていた不満が環境運動という形で噴出したのであり、「突然の啓示」でもなければ「技術信仰から進歩悲観論への転換」でもない。現代環境運動は、大気汚染対策、水質保全、森林政策、労働問題、消費者保護、自然保護などの多くの部門から構成されており、それぞれの分野には長い前史がある。1970年代の新しさはテーマそれ自体にあるのではなく、「それらが束ねられ、相互に結びついたこと」にあり、その結びつき方が新しいのである。

こうした70年代の動向、在来の複数テーマが結びついて新たな運動が形成されたことは、「新しい社会運動」研究、市民イニシアティブ研究の分野でも指摘されている。例えばブランド等によれば（Karl-Werner Brand; Detlef Büsser; Dieter Rucht (1986) *Aufbruch in eine andere Gesellschaft. Neue soziale Bewegungen in der Bundesrepublik*），1968年以降多数の市民イニシアティブが組織され、交通政策、大気汚染、騒音被害、フェミニズム、マイノリティーとの連帯など、多様な活動が繰り広げられてきた。これらの運動参加者たちは1970年代半ば以降、〈エコロジー運動〉と自己認識するようになった。この抽象的理念〈エコロジー〉が、そのあいまいさ故に、多くの市民運動の合流を可能にしたと同書は指摘している。ハーゼンエールの『シヴィル社

会とプロテスト』(Ute Hasenöhl (2011) *Zivilgesellschaft und Protest. Eine Geschichte der Naturschutz- und Umweltschutzbewegung in Bayern 1945 – 1980*) でも、1970年代の環境保護運動再編が取り上げられている。現代環境運動形成には、このように在来運動の合流という側面があるが、ラトゥッカウは主に政策に焦点をあてており、運動の担い手の分析は十分とは言えない。

ラトゥッカウは、現代環境運動にはそれまでの自然保護とは異なる要素があるとする。第一は科学との接点である。環境意識の根底にあるのは「五感では知覚できない危機への不安」で、この危険性は科学によってのみ知ることができる。初期、近代科学には否定的であった環境運動は、次第に自らを応用科学（エコロジー）と理解するようになり、運動の科学化が進行した。第二は精神的・宗教的側面である。ラトゥッカウは「自然との和解」という理念に、自然を人格的なものと見做す心性を読みとり、欧米のエコ運動は、当人の自覚以上にキリスト教の伝統に根づいていると指摘する。そもそも人間が自然（理想状態）を破壊したという発想自体が、原罪による楽園追放のモチーフと重なり合っている。第三は、環境運動が「国家制度と近い関係」をもつなかで成長してきたことを挙げ、「制度的背景なしには、環境意識の歴史は描けない」としている。

環境保護は政策と結びつかねばならない、これが本書の基本的考え方である。ラトゥッカウは「重要なのは政治ではなく、新しい意識である」という考え方を批判し、意識だけではたいしたことはできない、と主張する。緑の党の政治家たちが往々にして成功しなかったのは、彼らが「自らが掲げる未来のヴィジョンを政治目標として理解しなかったから」だと捉えている。環境政策を実践するためにまず克服しなければならないことは、途上国と工業国との利害調整である。国際環境政策は、グローバルに行われて初めて効果的なのだが、それが工業国の環境言説の押し付けになるなら、「人類を最悪の紛争に突き落とし」かねず、これはツーリズムやロマン主義と同質の「遠方の自然へのまなざし」にすぎない。環境史を顧みるならば、人間と自然との共生は常に小空間において成立しており、環境問題が最も適切に解決されるのは該当の現地であった。熱帯雨林の保護も、資源利用の抑制も、それが「想像上のエコロジー的義務」としてではなく、その地域住民の日常体験と結びついて初めて受け入れられるのである。

環境政策の次の障害は、過去の自然汚染とは異なって、現在の環境汚染には原因と結果がそれほど明確ではない点である。ラトゥッカウに依れば、環境政策の効果的实施のために必要なのは問題の理解でも、新しい意識でもなく、「行動へと促す圧力」である。しかし、今日対応が求められる長期的環境リスクに関しては強い圧力が存在しない、気候

変動政策がうまくいかないのは、差し迫った危機感がないためである、と氏は論ずる。人間が愛することができるのは「自分のため自然」だけという指摘は、極めて示唆に富んでいる。

4 討論にむけて

本書の内容に関して、いくつか今後の討論が求められる点がある。そのひとつは、5章までの歴史叙述と、6章以降提示される現代環境問題解釈との関わりである。3章から5章までの分析の中心は、第二次大戦以前の諸地域における政権担当者による自然資源管理政策であり、この歴史を踏まえて6章以降において、現代環境問題の特質を考察し、将来の環境保護政策のあり方に関する提言をおこなっている。この議論展開の中で、〈現代環境意識〉の部分のみが、それ以前の叙述と完全には連結していないような印象を与える。ラトゥカウは、現代環境意識の宗教性、心理面に着目し深い洞察をしている。この意識には前史はないのだろうか、と評者は問う。確かに5章以前に、衛生政策、伝染病への不安などが語られている箇所があるものの、自然資源管理史叙述の綿密さと比べると、心性史は極めて簡素である。ラトゥカウは「想像に基づく不安感」を現代環境意識の中核として指摘しているが、ロマン主義的自然保護を担った都市教養市民もまた同様だったのではないだろうか。彼らもまた、現実の状況というよりは、想像に由来する危機感を抱いており、自分の身の回りにある自然の破壊がもたらすかもしれない「仮説リスク」に怯えていたのではなかろうか。本書は現代環境史を自然資源管理史の展開として描いているため、初期自然保護運動に関してはわずかな言及しかない。

次に、現代環境意識の根底には〈不安〉があり、これは癌と放射能への不安であるとしているが、この〈環境意識〉と〈放射能不安〉との結びつきが、どこまでドイツ社会に特有なのか、どの程度グローバルな現象として一般化できるのか、今後の検証が必要だろう²⁾。また、この〈環境意識〉は、経済状態、教育水準を超えて共有されるだろうか。本文359頁にあるように、環境運動は「もはや飢えを知らず、ポスト物質主義的な価値を求める裕福な工業国の現象」である。ラトゥカウは、工業国における環境運動の高まりと途上国での深刻な環境破壊との同時性を指摘しているが、そこにも、環境破壊は必ずしも環境運動を誘起するものでないことが明らかになる。健康は確かに全人の願いだが、健康維持に心を向けることができるには、一定の生活安定が必要であろうし、差し迫った明日の生活に追われているひとに、確率の低い残余リスクが起こった場合を思

い描く余裕はないだろう。こうした人々にとっての〈環境〉とは何なのだろう。

この点に関して、2008年英語版の加筆箇所では〈環境保護の全人類性〉が掲げられているが、これにはどこかユートピア的な響きがある。ラトゥッカウは、グローバルな環境保護とローカルな日常生活上の利害とは一致するはずだと考える。環境保護は「その根本レベルでは」すべてのひとに共通の要求なのだから、である。すなわち「清浄な空気と、良質な水」、この二つが満たされるならば、その時「地球上のすべての人間は、大きな喜びを感じる」のであり、その他の環境問題も、多くは解決する。水と空気、「これが環境倫理の最善の基盤」である。ここで、それまでの緻密な議論から大まかな理想像へと飛躍していると言わざるを得ないが、これがラトゥッカウの魅力かもしれない。

今後の検討を要する部分はあるものの、これはすべての研究書に言えることである。総合的に評するならば、本書は農業、林業、治水の歴史など、様々な分野での膨大な研究成果を、長期的・広域的視野から包括しており、極めて多くの情報を提供している。さらに、現代における環境問題を根底的に分析し、その本質に関する的確な指摘をおこなっており、このテーマに従事する研究者のみならず運動関係者にとっても見過ごすことのできない大著である。初版から年月は経っているものの、邦訳出版を評者は歓迎し、この長編を訳された森田・海老根両氏の労を高く評価したい。本邦訳は2008年英語版のための加筆・修正が生かされており、ドイツ人以外の読者を想定とする変更により本書の論旨が明らかになった。またナチス時代に関する部分では、とくに加筆が多く、初版2000年時以降の研究成果が反映されている。英語版のために執筆された終章では、現代環境政策に関するラトゥッカウのその後の考えの展開が提示されており、既に初版を読まれた研究者の方にも一読をお勧めしたい。また、日本の環境保護、とくに原子力発電をめぐる新たに書き下ろされた節があり、いくつかの事実誤認が気になるものの、日本の環境保護文化への「外からのまなざし」は興味深い。日本の環境保護を担う人びとは、ラトゥッカウの指摘にどのように応じるだろうか。この邦訳出版を機に、環境保護問題に関して日独の対話が活発になることを期待したい。

注

*原書は、Joachim Radkau, *Natur und Macht : eine Weltgeschichte der Umwelt*, C.H. Beck, 2000.

1) 他に、近代以降の自然に関する文化史として Heinz Dieter Weber (Hg.) (1986) *Vom Wandel des neuzeitlichen Naturbegriffs*; Gernot Böhme (1997) *Natürlich Natur*; Peter Koalowski (2001) *Natur und Technik in der Weltreligionen*, ドイツ史における環境保護・

エコ意識の歴史を描く Just Hermand (1991) *Grüne Utopien in Deutschland*; Ulrich Linse, *Ökopax und Anarchie. Eine Geschichte der ökologischen Bewegungen*, ドイツ帝政期以降のエコ運動, 環境政策史を叙述する Andreas Knaut (1993) *Zurück zur Natur*, Klaus-Georg Wey (1982) *Umweltpolitik in Deutschland* などがある。

- 2) ラトウカウは, 2011年『エコロジーの時代』(Joachim Radkau (2011) *Die Ära der Ökologie. Eine Weltgeschichte*) において, 現代環境運動以前の環境に関わる諸潮流, 衛生運動, 生活改善運動などに関して, 1章を割いて叙述している。核エネルギー問題における「ドイツ特有の道」に関しては, 未だに実証に基づく説明がないと指摘して, ドイツ独自の立場に関して論じているが, 説明モデルの考察にとどまっており, 今後の実証研究が求められる。